

病院薬剤師によるファーマシーマネジメントの実践 に関する研究

一木, 裕子

<https://hdl.handle.net/2324/1785380>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（臨床薬学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	一木裕子			
論文名	病院薬剤師によるファーマシーマネジメントの実践に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	島添 隆雄
	副査	福岡大学	教授	神村 英利
	副査	九州大学	准教授	江頭 伸昭
	副査	九州大学	准教授	窪田 敏夫

論文審査の結果の要旨

近年の医療の高度化、複雑化、多様化は、病院薬剤師の職能にも大きな変化をもたらしている。注射薬の調製を含めた調剤業務に加え、薬剤管理指導業務などを通じて病棟、手術室、ICU、外来などで活躍する薬剤師も増加している。病院薬剤師は、医薬品による医療事故防止の観点から、患者の安全対策、特に副作用及び薬害を防止することに責任を持たなければならない。このように病院薬剤師の業務転換期が訪れていることは明白であり、現在急速にチーム医療が進展していく中で、病院薬剤師も新しい業務にチャレンジしていく必要性が求められる。そこで筆者は、病院薬剤師に求められる業務を具体的にしていくために「ファーマシーマネジメント」に着目した。ファーマシーマネジメントの定義はわが国においてはまだ明確にはされていないが、アメリカでは「Pharmacy management」という言葉をタイトルに含む論文や書籍が数多く出版されており、病院経営実務の重要な分野になってきている。赤瀬朋秀らは「病院薬剤部門における各種経営資源（医薬品・物流・費用・人材・情報・患者安全など）のマネジメントを実践することにより、病院経営に資すること」と提唱している。この観点から、病院薬剤師は病院経営を助けることのみが目的ではなく、日常業務の流れの中で病院薬剤師が薬物療法の質を向上させ、医薬品安全管理を通じて患者貢献することが重要であると考え、さまざまな新たな試みに取り組んできている。

そこで、病院薬剤師によるファーマシーマネジメントを実践するために、第一章では、採用医薬品数の削減と後発医薬品の採用促進の取り組みとその評価について研究を行った。その結果、3年7ヶ月で採用医薬品数を1,339品目から748品目へと44%削減することができ、かつ、後発医薬品採用率を5%から31%へと導き、後発

医薬品使用体制加算1を取得することができ、病院薬剤師も医薬品採用分野において積極的に意見を述べ、職能を発揮することによって新しい役割として病院経営に充分に関与できることを実践で示すことができた。同時に、規格違いの採用医薬品を減らすなどによって、医薬品を安全に使用することができるようマネジメントすることに貢献できた。

第二章では、糖尿病外来において医師の診察前に病院薬剤師がチェックシートを用いた服薬指導を行い、血糖コントロール不良の対象者に対して、病院薬剤師の指導の効果が見られた。その要因として、第一に1人平均20分間をかけて患者の薬物治療の問題点を抽出、指導を十分に実践できたため、第二に医師と薬剤師が患者の問題点について協議し、対応できたためと考えられる。これらの2点が院外の薬局薬剤師の指導に加えて機能し、HbA1c値のコントロールの改善に病院薬剤師による薬学的管理が有効であることを導き出した。日本では、まだ、糖尿病外来で病院薬剤師が積極的に関わった報告はあまりないため、今回の研究において、病院薬剤師の新しいマネジメントとして糖尿病外来における活動が有用であることを示すことができた。6年制薬学教育を修了した薬剤師が医療現場に輩出され、病院薬剤師の業務変換期が期待されている時代において、病院薬剤師も新しい業務を実践していく重要性を示すことができた。糖尿病外来での病院薬剤師の活動によって、医師や周りのコメディカルとの協力体制も整い、より一層病院薬剤師の必要性を感じることもできた。しかしながら、すべての糖尿病外来患者に服薬指導をすることができた訳ではなく、病院薬剤師の人員の確保、効率のよい服薬指導方法の確立、保険点数加算がまだ無いなど問題はまだまだ多い。今後は、病院薬剤師の更なる飛躍を目指して、他施設の薬剤師などと協力し合いながら本研究の活動範囲を広げていき、ファーマシーマネジメントの実践を行っていくことができるように努力していきたい。

本論文は、上記の内容を記述しており、第1章並びに第2章ともに、我が国における病院薬剤師の新たな職能について評価している。本論文は、日本における臨床現場の報告として全く新規かつ優れたものであり、博士（臨床薬学）の学位に値すると認める。